



令和4年12月31日現在 大体の骨組みができ、全体の姿が解るようになりました。左の屋根は本堂です。

楽音

佛歴二五六六 西歴二〇二三
令和五年正月号

発行 楽音寺 住職 内藤睦雄
電話 090-3140-3931 (携帯)

0553-47-3475 (おき)

FAX 0553-47-3495 (只今使用不可)
寺庭 090-8643-0852 (藤井牧子)

正月・二月の予定

一月四日 新年ご挨拶

十日 臨濟寺

臨濟禪師每歳忌・開祖太原禪師初月忌・開単布鼓庵每歳忌

十二・十三日 師範会 (本山)

二五・二六日 代表委員会 (本山)

八・二十二日 坐禅会 朝六時三十分

二月八・九日 師範準師範研究会 (本山)

十五・十六日 和歌山教区講習会

十二・二十六日 坐禅会 朝六時三十分

今年も新年のご挨拶に、檀徒の皆様には『薬師瑠璃光如来本願功德経』のお札とともに、各家の先祖年忌表をお渡しいたします中には百回忌以上のご先祖を持つ方もおありですが、ぜひ家族の中で話題の一つにしてください。また赤い文字になっている方は年忌正当年に当たっている年です。そしてご存じのように一昨年の火災で大切な過去帳も焼失しました。空白の部分など埋められるようでしたらご一報ください。今年もすべての方に佳き年でありますように。

今月の掲示板

時を待つ



蠟梅一枝 手折り来て

三年前の私の不注意から起こしたケガ、そのダメージから完全に脱することができる

その時、庫裡火災の後再建が無事円成するその時、家族を亡くしその痛手の、いつか癒えるだろうかその時、あの蠟梅の高貴で、「馥郁」という言葉はこの花のためにあったかと思えるほどの花を手元に置いた、心震えんばかりの感動が、この句にはある。「時を待つ」とは何か佳き兆しを連想させてくれる。

さらに、両親が旅立った後の供養もコロナだからとかなんとか理由をつけて怠ってきたことへの胸の痛みにも、一步踏み出す、その時でもある。松下幸之助曰く、事をなす人は必ず時の来るのを待つ、時を待つ心は、春を待つ桜の姿といえよう。

阿吽（あうん）

樂音寺の仁王門、修復する前には仁王さんの足元に大きな藁草履が掛けてありました。五、



六十七センチはあろうかと思うほど大きな仁王さんの草履でした。仁王さんは、仏法を守るといふ大きな役割のほか、健脚へのご利益があるとのことでした。

たいてい右側に立つ仁王さんは口をカッと開く阿形像、左はムツと閉じる吽形像です。「阿」と「吽」とは始まりと終わりを表すこととはご存じでしょう。例えばだるまさんに目を入れるときは仁王さんの左右の位置関係から、向かって右側の目、つまりだるまさんの左目から願いを込めて入れ、事が成就したあかつきに右目を入れることが一般的です。人間もオギャーと叫んで生まれ、ムーと達観覚悟して命終えます。物事すべてがこの二文字で表現されます。口の開け閉めから「呼吸」と「吸気」の意味となり、両者の息が合うことを「阿吽の呼吸」といいますね。この阿吽が梵字の配列である最初と最後であり、五十

音順の「あいいうえお」でも同様です。さらにこの二文字の意味を深めると、悟りを求めて仏道に入らんとする心と、修行の先に見える大いなる気づきを意味しているといわれます。つまり、私たちはその「阿」と「吽」の間を右往左往している訳です。

臨濟寺専門道場へ掛搭

翌々日、すなわち臨濟寺山門をくぐって「たのみましよう」と入門を乞うてから丸四日。翌朝、まだ客扱いの中、朝粥をいただき、且過寮と札のある小部屋に入った途端「老師に相見するから支度しろ」と言われ「ああ入門を許される」と安堵。支度といっても足袋を履くだけ。

老師、いわゆる禅マスター「悟りを開いた人にこれから会うんだ」そんな恐れとともに

胸膨らむ思いがした。老師の前では教えられたとおりの作法をし、座具を展べて三拝の後深々と低頭。頭を畳にこすりつけながら、太った腹が苦しい。そこで事前に読んだ本を思い出す。その時老師に会うや否や切り掛かる、あるいは逆に「禅とは何か」とか「死んで生きる」とは」と挑み挑まれてお互いの力量を試すような、切羽詰まったぎりぎりの世界があるはずだった。

先程の雲水さんのお茶、老師にならって飲み干す、少ないしぬるいし美味くない。



でも気付くとお香のとてもいい香り。私の授業寺の事、出生の事、少しだけ訊かれ応える、これが老師？ 思ったより小柄で物静か、なんだか安心できる雰囲気、声が小さく「喝！」どころではない。「どこぞのオヤ

ジか」と思った瞬間、気取られたか居住まいを正される。腹を読んでる。少ない会話を済ませ老師の小部屋を出て、思った以上の緊張感に疲労を少々。釈迦以来二千五百年間、多くの僧侶はここを通ってきているのだと、改めて心の中で拝をする。

編集後記

再建工事の木工さんたちは、暗くなっても電気を付け、月が替わるギリギリまでも仕事の音が止みませんでした。お寺を訪れる方々は一様に「立派だねえ」「大きな仕事になったねえ」と声をかけてくださり「ここが大玄関で、まっすぐ廊下が続いてね」と説明する声も弾みます。

皆さんには心配を掛け通してましたが、もう少しお時間を頂きたい。